



未来を夢見て

2021/1/5 No. 55

令和3年 新年にあたって～学び続ける教職員集団を目指して～

新年明けましておめでとうございます。

いよいよ明日から3学期です。冬休み期間、学校の携帯電話を持っていたいた徳田教頭先生から「携帯が鳴るようなことはありませんでした」との報告を受けています。明日は元気に子供たちが学校に戻ってきてくれるものと思っています。

冬休み期間も徳田教頭先生、安藤教頭先生、島貫先生、堀田先生には、校地内を巡視していただきました。寒い中ありがとうございました。また、玄関には「謹賀新年」のすてきな掲示物を安藤教頭先生に作っていただきました。先生方も今日出勤のとき目にされたことと思います。

明日の始業式では、干支の「丑」について中心にお話しし、繰り返しですが「命を大切にすること」「自分から挨拶すること」を伝えます。原稿は共有ドライブに、掲示資料は堀田先生にお願いしましたのでご確認願います。また、学校が閉庁になるときは、今野さんと杉元さんが校内の廊下全部にワックスを掛けてくださっています。明日の始業式の話でも触れますが、先生方からぜひ子供たちに紹介してください。

さて、この冬久し振りで「新編 教えるということ」(大村はまちくま学芸文庫)を読み返してみました。国語の研究をしている小野小学校に着任してからずっと読もう、と思っていたのですが、なかなか読む機会がありませんでした。この本は1970年、富山県の小学校新任教員研修会の講話がベースになっています。半世紀たった今読み返してみても決して色褪せることのない大村先生の語り口に、背筋が伸びる思いで(今度は校長の立場で)読み返しました。小野小学校の先生方も大村先生の名前を聞いたり、著作を手にとってみたりした経験のある方は多いものと推察します。この本を手にとると、教師の仕事の厳しさと同時に尊さも伝わってきて、子供たちに向かうエネルギー、研究に向かう覚悟が湧いてくるように思います。大村先生と言えば国語教育の第一人者ですので、国語の研究を行っている本校の先生方には、ぜひその実践や生き方については知っておいてほしい一人です。今回、(校長の立場で)と前置きしたのは冒頭、大村先生が次のようにお書きになっているからです。「いちばん若い時代は非常に優れた校長先生のもとにいました。それが私の一生の幸福であったと思います」ここでいう「非常に優れた校長先生」がどのような校長先生であったかは、みなさんお考えください。

昨年の4月から小野小学校にお世話になって、早々臨時休校と感染症対策の対応でスタートしました。実は、自分では(もっとこんなことをしておけばよかったなあ)と思うことが多々あります。

その1つがやはり一人の教師として授業についてもっと考え、研究し続けることです。

そこで、卒業前の6年生にお願いして、各学級で授業を行わせていただくことになりました。それは私の尊敬する恩師からいただいた「管理だけの管理職にはなるな!」という教を肝に刻み直す意味でもあります。また、大村先生の前著「教師の資格」の中で「(前略)研究をせず、子どもと同じ世界にいない教師は、まず「先生」としては失格だと思います。子どもと同じ世界にいたければ、精神修養なんかではだめで、自分が研究しつづけなければなりません。研究の苦しみと喜びを身をもって知り、味わっている人は、いくつになっても青年であり、子どもの友であると思います。(後略)」にも影響されています。

正月早々固い話になって恐縮ですが、小野小学校の教職員の皆さんは極めて勤勉な職員の皆さんであることは間違いありません。だからこそ、この職場の雰囲気やお互いに切磋琢磨しながら研究に臨む姿勢を今後も継続していくため、何より824名の子供たちのために、学び続けることのできる教職員集団として新年のスタートを切りたいものです。

(文責：手代木)

